熊本大学教育学部紀要
第68号, 105－113, 2019

学力についての一考察

― 思考の純粋な潜勢力としての無能 ―

今　井　伸　和

A study of academic ability:

Incompetence as a pure potentiality of thought

Nobukazu Imai

（Received September 30, 2019）

はじめに

本稿は，学力において無能がどのように位置づけられるのか, という問題について問うものである．通常，無能は有能に対して，低く見積もられるであろう．たとえば, 学校教育基本法第三十条第二項にあるように,「基礎的な知識及び技能を習得」している者は有能であり，また，これらの知識・技能を活用して「課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力その他の能力」を有する者は文字どおり有能である．それに対して，それらの知識・技能を習得していない者は無能であり，習得していても，それらを活用できず，課題を解決できない者は無能であるのである．それにしても，どうして無能を取りあげる必要があるのか．知識技能を習得し, それらを活用し課題を解決した方が, すなわち無能よりも有能のほうが，いいに決まっているではないか.

それについて，やや迂遠になるが，歴史なき民についてすこし言及したい．周知のように，東欧の民族のことを歴史なき民という言葉を用いて蔑んだのは，エンゲルスである.「かつて固有の歴史をもったことがなく，最初の，もっとも粗野な文明段階に達したそのときからすでに外国の支配を受けている民族，あるいは外国のくびきによってはじめて最初の文明段階にひきずりこまれる民族, そういう民族は, 生存能力をもっておらず，どんな独立にもけっして到達することはできないだろう.[1]」歴史は，被抑圧民族の側（ここでは東欧の民族）よりも，むしろ抑圧した民族の側（ここでは西欧の民族）に沿って，書かれることが一般的であろう．生者・勝者の側から歴史は記され，死者・敗者の側から歴史が書かれることは稀なのである．歴史なき民のような死者・敗者の物語は，それはいわば, 世界から見捨てられたものである. それと同じように, 無能の人の物語は，グローバル資本主義においては, 誰にも描かれることなく，うち捨てられた歴史なのである．グローバル資本主義において有能である者，そこで勝ち残った者の歴史のみ語られ，無能の者の物語は顧みられない．かといって，現代における最大の勝者である，グローバル資本主義がうまくいっているとも到底思えないし，その歴史が未来永劫に礼賛されるものでもないであろう.

以上のような問題意識から本稿では，無能それ自体の意義をすくい取れないか，無能をすくい取るような学力観はないのか，という問題を考察する．考察の順序は以下の通りである．まずはじめに，現代日本における学力観について概観する．次に，有能を基準とするような学力観を相対化するために，潜勢力について考察する．潜勢力の考察をふまえ,『おそ松さん』や『バートルビー』を手がかりに，無能についての意義を明らかにしたい.

1.「生きる力」としての学力

(1)「確かな学力」

まず，現代の日本において学力がどのような意味を担っているのかをおさえておこう．周知のように, 1996 年中央教育審議会において,「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申)」が出された．そこでは,「生きる力」を育てていくことが「これからの教育の在り方の基本的な方向」であるとされる.「生きる力」とは,「自分で課題を見つけ, 自ら考え，自ら問題を解決していく資質や能力」であると定義されている．この「基本的な方向」は 2019 年現在でも変わっていない[2]．したがって，現代日本において求められている学力とは, 広い意味では,「生きる力」だと考えてよいであろう.

もっとも，2003 年中教審答申「初等中等教育にお

ける当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」では，「生きる力」を，「確かな学力」「豊かな人間性」「健康・体力」という三つの側面に分類し，そのうちの「確かな学力」が「生きる力」の知的側面だとされている．「確かな学力」とは，「知識や技能に加え，思考力・判断力・表現力などまでも含むもので，学ぶ意欲を重視した，これからの子どもたちに求められる学力」とされている．したがって，現代日本において公式に考えられている学力は，広い意味では「生きる力」，狭い意味では「確かな学力」のことだと言える．

では，「生きる力」の知的側面である「確かな学力」を身につければ，どんないいことがあるのだろう．2016 年の中教審答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」では，「生きる力」を子どもたちに育成し，予測困難な時代に，一人一人が未来の創り手となることが期待されている．

> 子供たち一人一人が，予測できない変化に受け身で対処するのではなく，主体的に向き合って関わり合い，その過程を通して，自らの可能性を発揮し，よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である．

「確かな学力」のおかげで，われわれは自らの可能性が発揮でき，よりよい社会の形成に貢献し，幸福な人生が送れる，とされる．はたしてうまくいくのだろうか．また，それがうまくいくというエビデンスは示せるのだろうか．少なくとも，そうはうまくいかないだろうという，正反対のエビデンスなら示せる．次節では，「生きる力」を育めるのは，家庭環境に恵まれている子どもであるという社会科学では常識中の常識である事実を示してみよう．

(2) 学力と家庭環境との相関

教育社会学において，子どもが生まれ育った家庭の社会・経済・文化的な環境が学業成績に影響を及ぼしていることは，疑う余地のない定説であろう．では，「生きる力」のような，これまでの知識詰め込み型の学力とは異なる，新しい学力観においては，家庭環境が学力に及ぼす影響は，小さくなるのか，それとも大きくなるのであろうか．多少ペーパーテストの点数は低くても，「生きる力」が育てばいいという考え方もあるからである．

苅谷剛彦は，『学力と階層』のなかで，この問題を検討している．苅谷は 2001 年，大阪の小学 5 年生 921 名および中学 2 年生 1281 名を対象に調査を行った．そこで，「家の人はテレビでニュース番組を見る」「家の人が手作りのお菓子を作ってくれる」「小さいとき，家の人に絵本を読んでもらった」「家の人に博物館や美術館に連れていってもらったことがある」「家にはコンピュータがある」といった質問項目をもとに，上位・中位・下位と 3 つに文化的階層グループを分類し，それぞれのグループごとの，学力テストの結果，学習意欲，学習行動について調査している [3]．

まず学力テストの結果はどうであろうか．上位グループの平均点は下位グループのそれに対して高く，その差は，小学校国語では 7 点差，算数では 8 点差であり，中学校国語では 9 点差，数学では 14 点差であった [4]．

では次に，「生きる力」への家庭環境の影響はどうであろう．苅谷は，「生きる力」のような，いわゆる「新しい学力」が身についているかどうかを調査によって把握することは容易ではないとしながらも，質問紙による間接的な測定がある程度可能だとしている．測定によると，中学生の場合，「調べ学習の時は積極的に参加する」という質問では，上位グループが 51.0％なのに対して，下位では 24.8％である．「グループ学習の時にまとめ役になることが多い」についても，上位が 35.6％，下位が 16.7％であり，いずれの質問項目でも上位と下位で 2 倍以上の開きがある [5]．

最後に，授業中の態度や授業への取り組みについて見てみよう．「先生が黒板に書いたことはしっかりノートにとる」「授業でわからないことをあとで先生に質問する」「テストで間違えた問題はしっかりとやり直す」という，学習への「主体的な」かかわりについても，階層グループ間の格差は大きい．「生きる力」という新しい学力観のもとでおこなわれる，子どもたち自身が『自らすすんで』おこなう学習においても，家庭環境の影響が現れるのである [6]．

以上見たように，ペーパーテストの結果に示されるような，知識・技能の習得といった旧来の詰め込み型の学力であれ，中教審が提言するような，変化の激しい時代，先行不透明な時代に必要とされる「自ら学び，自ら考える」ような学力であれ，経済資本や文化資本に恵まれた家庭環境の子どもが有利なのだ．そうだとすると，学力が旧来の詰め込め型の学力観から，「自ら学び，自ら考える」ようないわゆる「新しい学力観」になったからといって，学力というものさし，すなわち有能であるかどうかという基準を用いているかぎり，社会的な格差や理不尽さは解消されないわけである．

有能であることに与する発想から，われわれは抜け出すことができるのだろうか．この問題を考えるために，次章で潜勢力（デュナミス）について考察してみ

よう．なぜなら，潜勢力が有能であることを相対化し，これまでなおざりにされてきた無能の位置づけを可能にするからである．

2. 潜勢力

(1) 小玉の問題提起とその結論

まず，小玉重夫が無能という視点から学力についての根本的な問題提起をしているので，それについて見てみよう．小玉は，学校での学力の形成を支えている原理はメリトクラシー（能力主義）であるとする[7]．それは，出自によって地位が決定される前近代社会から個人の業績（メリット）によって社会的な地位が決定される近代社会への転換によって広がった原理である．また，メリトクラシーは地位配分だけの機能にとどまらず，そのような地位配分をひとびとが正統なものとして受け入れ，それによって社会に包含されるようになるという，社会の平等化と社会統合の機能をも有するものとして捉えられるようになった，ということである．

しかし，小玉によれば，このメリトクラシーの原理は1970年代にはくずれはじめていた．コールマンレポートやバーンスティンやブルデューの文化的再生産論によって，メリトクラシーは，社会の平等化ではなく，むしろ社会的不平等や格差の再生産に寄与していることが明らかにされるのだ．先述の苅谷の調査ではっきりしているように，「生きる力」のような新しい学力観においても，文化レベルの高い家庭に生まれた子どもが有利であり，理不尽にも格差を再生産しているのである．

そこで小玉は，既存の学力概念を組みかえるために，メリトクラティックな基準，つまり，できること，有能であること，といった基準から学力を見る見方をいったん相対化せねばならないとする[8]．その手がかりとして，小玉は，メルヴィル『バートルビー』を取りあげている．「バートルビーの逸話を手がかりとしながら，学力や能力といった概念の対極に位置すると思われる無為や無能という視点から，学力の問題を逆照射してみたい．[9]」バートルビーについては別の章であらためて考察するとして，小玉の結論を以下に検討してみたい．

小玉は，田崎英明の「できること」と「考えること」との区別を援用し，「考えること」は「誰にでも備わっている能力」だと結論づけている[10]．しかし，ほんとうにそうであろうか．まず第一に，「考えること」がある種の能力だとすることによって，それはまた有能・無能の二元論に回収されるのではないだろうか．第二に，考える能力は「誰にでも備わっている」と，はたして言えるのかどうかが疑問である．たとえば，強制収容所でムーゼルマンと呼ばれた人々，生きる気力を失った無力な人々は考えることができるのだろうか．あるいは，特別支援学校の重度の知的障害をもつ緘黙の子どもたちが考えていると端から見ていて判断することができるのだろうか．考える能力は誰にも備わっているだろうという楽観論で，はたして済まされるのだろうか．

たしかに，小玉は，アリストテレスに則って，潜勢力と現勢力とを区別し，近代の能力主義が潜勢力を現勢力に転化するものだとして批判している[11]．小玉が言う「考えること」は，論理的に言って，現勢力に転化しない純粋な潜勢力としての考えることであり，すなわちそれは考えないことにほかならない．もう少し厳密に言うと，現勢力に転化した考えることと純粋な潜勢力としての考えることとを区別するポイントは，「考えることができる」が「考えないこともできる」を含意する場合である．その点について小玉の議論はいささか曖昧さが残る．

もちろん，小玉の問題提起は根本的であり示唆に富んでいる．それにもかかわらず，奇妙なことに，小玉は，考えることが誰でも備わっている能力であると結論づけ，そのことによって結局，考えるというメリット（能力）に回収されてしまっているのである．そうだとすると，重要なのは，現勢化に転化されない純粋な潜勢力をわれわれはどう考えればいいのか，ということである．そこで，次節では，この純粋な潜勢力についてアリストテレスがどう考えているかを概観しよう．

(2) アリストテレスにおける潜勢力とそのアポリア

アリストテレスの現勢力と潜勢力との関係について，アガンベンが述べていることが参考になる．「じつのところ，何らかのものとして存在したり何らかの事柄を為したりすることができるという潜勢力はすべて，アリストテレスによれば，つねに，存在しないことができる，為さないことができるという潜勢力（デュナミス）でもある．そうでなければ，潜勢力はつねにすでに現勢力へと移行し，現勢力と区別がつかなくなってしまうだろう（これはメガラの徒の主張であるが，『形而上学』第九巻でアリストテレスによってはっきりと反駁されている．）[12]」

実際にアリストテレスは，『形而上学』において，メガラ派を批判して，潜勢力について述べる[13]．すなわち，メガラ派は，不合理にも，建築家は建築していないときには建築する潜勢力を有しないというが，建築家は建築をしていないときにも，建築する潜勢力を保持している．

たとえば，歩くということも同様である．われわれの歩行は，歩行することができるとともに，歩行しないこともできるものとして存在している[14]．思考について言えば，われわれは思考することができるし，思考しないこともできる．要するに思考は潜勢力として，つまり思考しないこともできるものとして存在するのである．

しかし，このように，思考を潜勢力として見なすと，アリストテレス自身が認めているように，解決困難な問題にさらされる[15]．

まず，思考が何も思考しないなら，つまり思考が潜勢力の状態に留まるなら，どうしてそれが尊いと言えよう．それはあたかも眠っている人のようなものだからだ．

かといって逆に，思考が，現勢力という状態にある思考ならば，高貴ではなくなってしまう．なぜなら，現勢力とは，何か（＝思考以外のもの）を思考することであり，その何かに思考は従属してしまうからだ．だとすると，思考の高貴さは潜勢力になければならない．

だとすると，いったい思考は現勢力なのか潜勢力なのか．この問題について，アリストテレスは，やはり思考の本質は純粋な潜勢力であるとは述べている．『魂について』において，アリストテレスは，潜勢力こそ思考ないし知性（ヌース）の本質であるとしている．すなわち，思考は，潜勢力ということ以外に，いかなる本性ももたないとされる[16]．

思考は純粋な潜勢力であるのか，それとも潜勢力が転化された現勢力なのか．このアポリアをアリストテレスが解決しているようには見えない．そこで問題の視点を変えてみよう．アリストテレスは，思考の本性は潜勢力だとはっきりと述べており，アリストテレスのこの言及にならって，われわれは，考えないこともできる（潜勢力）が思考の本質であるというべきではないか．それなのに，どうして現代のわれわれは，現勢力へと転化した思考にしか関心がなく，潜勢力としての思考に関心を寄せないのであろうか．現勢力として現れたものを有能と考え，潜勢力の思考は無能と考える．そのように考える理由は，そこに近代独特の見方が含まれているからではないか．そのことを明らかにするために，以下では『おそ松さん』について考察したい．『おそ松さん』に現勢力に転化するベクトルと潜勢力に留まるベクトルとの両方向があるからである．

3. 『おそ松さん』

藤田陽一監督『おそ松さん』は，赤塚不二夫『おそ松くん』をもとにつくられたテレビアニメである．第1期全25話が2015年10月から2016年3月までテレビ東京系列で放送された．

その後，2016年の新語・流行語大賞にノミネートされるなど，それなりに話題になり，第2期もつくられる．第2期は全25話が2017年10月から2018年3月まで放送される．さらに，藤田陽一監督『えいがおそ松さん』が2019年3月15日全国で公開される．

東京新聞2016年1月31日朝刊では，『おそ松さん』の人気ぶりを以下のように記している．「六つ子が表紙を飾り，六つ子のクリアファイルを付録にした月刊アニメ誌『アニメージュ』二月号は重版がかかった．重版は『機動戦士ガンダム』のマチルダを表紙にした一九八〇年三月号以来，三十六年ぶり．ただ，業界全体が盛り上がっているかといえば，『そうではない』と川井久恵編集長．一人勝ちに近い状況で，アベノミクスならぬ“マツノミクス”と表現する編集者もいるとか．」

(1)『おそ松さん』のリアリティ

まず，本節では『おそ松さん』がそれなりに人気になった意味について考えたい．『おそ松さん』の内容を要約することにはあまり意味がない．それはおよそナンセンスな内容のコメディであるからである．ここでは，『おそ松さん』の形式のみを簡単に述べておこう．「おそ松さん」は六つ子である．原作の『おそ松くん』から十数年が経ち，六つ子は成人している．大人になっても，精神的には全く成長せず，定職に就かず，ニートで童貞という設定である．ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』に典型的な教養小説（ビルドゥングスロマン）は，主人公が様々な体験や出会いを通じて，精神形成していく成長物語であるが，『おそ松さん』はそれとは全く正反対であり，いつまでたってもクズはクズなのである．このように，六つ子たちは，仕事がなく彼女もおらず，無為に日々を過ごしている．

だが，それが社会的に話題になった理由は何か．『おそ松さん』が社会に受け入れられた背景には，自分は世界の誰からも必要とされていないのではないかというわれわれの不安が『おそ松さん』に描かれているからではないだろうか．

自分が世界の誰からも必要とされていない不安は，たとえば，就職ができない場合につよく抱くものであろう．東京新聞2019年5月30日朝刊に，「氷河期世代，集中支援　やっと本腰　厚労省，自治体・企業に連携要請」という見出しの記事が出た．「氷河期世代」は，1993年から2004年頃に高校や大学を卒業した世代であり，他の世代にくらべて非正規雇用の割合が高い．所得も低いとされる．記事によると，以下の通りであ

る.「社会保険料を十分払えず高齢になって低年金や無年金で生活が困窮する恐れがあり，厚労省が対応に乗り出した.」

また, 朝日新聞 2019 年 6 月 12 日朝刊「氷河期世代, 雇用 30 万人増　3 年間目標　骨太の方針，原案公表」という見出しの記事によると，安倍晋三首相を議長とする経済財政諮問会議で「経済財政運営と改革の基本方針（骨太の方針）」の原案を公表し，氷河期世代について，今後 3 年間で正規雇用者を 30 万人増やす数値目標を含めた支援プログラムを設けている.「正規雇用した企業への助成金も見直して，企業側へのインセンティブ（動機づけ）も強化する」とのことである.

一般にわれわれは仕事によって自己のアイデンティティを確立することが多い．その仕事によって，自分が社会に必要とされ承認されていると感じるからだ. 逆に言って，仕事がないということは社会から必要とされていないということである．その一方で，社会ではなくある特定の個人から必要とされ承認されていることも，自己のアイデンティティにとっては重要な契機であるであろう．愛する人がいれば，仕事がなくとも，それほど人生は過酷ではない．しかし非正規であるということは，愛されるチャンスをも失うことを意味する.

というのも，男性は非正規就業者のほうが未婚の割合が高いことが統計的にわかっているからである [17]. とくに 30 歳代は男性の正規就業者の未婚割合が 30.7% であるのに対して，非正規就業者は 75.6% となっている．氷河期世代は非正規の割合が高いのだとすると, 必然的に未婚の割合も高くなると予想される.

したがって，自分は社会からも必要とされず，誰からも愛されていないのではないかという疑心が，現代社会の集合的無意識としてあるのではないか.『おそ松さん』がそれなりに話題になった背景には，以上のような現代日本社会における深刻な状況，すなわち自分が誰からも必要とされていないように感じる状況があるのではないかと推測できる.

とはいえ，六つ子は，この，誰からも自分は必要とされていないという疑心について，なかば笑い飛ばしているところがある．それがこのアニメの魅力にもなっている.

(2) 六つ子における相反する 2 つのベクトル

六つ子は，自分たちの境遇を甘受しているところがある．仕事も恋人もないけど，仕方がないね，俺たちどうせクズだし，と．それは，することはできるが，しないこともできるという，徹底的な無為（潜勢力）へのベクトルと呼んでいいかもしれない．たとえば，印象的な場面が第 1 期第 23 話「灯油」の回にある. ある冬の夜, 六つ子が自宅の居間でくつろいでいると, 石油ストーブの灯油がきれた．灯油の入ったポリタンクは屋外にあり，誰一人として寒い屋外に灯油をとりに行きたくないし，実際に行かないのである．六つ子たちは，別の誰かを行かせようとして，狸寝入りしたり，心理的攻防をくりかえしたり，暴力に訴えたりする．とにかく，彼らはその状況が求める要求に徹底的に応えようとしない. どう考えても, 灯油を入れにいったほうが楽で効率がよいと思うのだが，意地になって徹底的に灯油を入れにいかない．これは，灯油を入れに行くことはできるが，行かないこともできるという潜勢力のベクトルである.

ところが，その一方で，もうひとつのベクトルもあるのである．同じく第 23 話の「ダヨーン族」の回で, 六つ子たちが灯油を買いに行く途中で（屋外のポリタンクの灯油も切れていたのである），どういうわけか, キャラクターの一人であるダヨーンに口から吸い込まれ，ダヨーンの体内に暮らすダヨーン族のコミュニティに迷い込む．そこは働かなくとも何不自由なく暮らせるユートピアであった．六つ子はそこで結婚もでき，ずっとニートで幸せに暮らせることになり，そこに住みついてもよさそうな展開だったのだが，なぜか結局六つ子たちは現実世界に帰ることにする．チョロ松（三男）は次のように言う.「ぼくだって，ほんとうは，ほんとうは，外の世界で就職して，ちゃんとした人間になりたい．でも，やっぱり無理なんだ.」就活をしてもかっこばっかりで所詮うまくいかない, やっていることと言えば無為なことばかりだと．ほんとうは正規に就職して，結婚し，家族をもち，一人前の大人になりたいということを六つ子は強く望んでいるということである．そうすると，六つ子は，やはり，誰かから必要とされたいと願望している．潜勢力から現勢力への転化を期待しているのだ.

このように，六つ子にはまず，一方で，潜勢力として留まるベクトルと，他方で，自分たちの能力を開花させたいという現勢力へのベクトルもあるのである. 大澤真幸は,『おそ松さん』について次のように述べている.「六つ子は，本当は呼びかけられて，つまり世界に必要とされて，それに応えて何かしたいと考えている. [18]」

六つ子たちの，世界から必要とされたいという願望が表出しているのが，第 1 期最終回である．どうして六つ子はそれほどまでに世界から必要とされることにこだわるのか．この問題について，最終回の内容をふまえつつ，次節で考察しよう.

(3) 神からの呼びかけとしてのベルーフ

チョロ松が父親のコネで定職に就いたり, カラ松（次

男）が就活を始めたり，十四松（五男）がブラックバイトを始めたりする．それは，その人にしかできない仕事ではなく，生活のために誰にでもできるような仕事をするために，である．

だがしかし，長男のおそ松だけが妥協せずに，呼びかけを期待している．おそ松は，何からの呼びかけ，誰からの呼びかけを期待しているのか．それは，安易に就職したチョロ松らとは違って，他の誰でもない，あなたでなければならないという呼びかけを期待していたのである．それにしても，どうしてわれわれは，おそ松のように，呼びかけを期待してしまうのであろうか．

周知のように，マックス・ヴェーバーによれば，カトリック教徒が優勢な諸民族には見いだされないのに，プロテスタントが優勢な諸民族の場合に見いだせる表現があるという．それは「ベルーフ」である．

> さて，〔「職業」を意味する〕ドイツ語の「ベルーフ」》Beruf《という語のうちに，また同じ意味合いをもつ英語の「コーリング」》calling《という語のうちにも一層明瞭に，ある宗教的な――神から与えられた使命（Aufgabe）という――観念がともにこめられており，個々の場合にこの語に力点をおけばおくほど，それが顕著になってくることは見落としえぬ事実だ[19]．

ドイツ語の Beruf は召命や天職の賦与などと訳される．英語の call と同様，Ruf も呼び声を意味している．つまり，われわれは神からの呼びかけに応じて，この仕事をしているとプロテスタントは考えるのである．神から呼びかけられ，神から必要とされてやっているのだという意味が仕事に賦与されるのだ．このように，ヴェーバーによれば，プロテスタンティズムによって，日常の世俗的職業が宗教的意義を有するようになり，この天職概念が資本主義の発展に寄与したのである．確かに，現代では宗教的信仰が希薄になっているし，そもそもわれわれはプロテスタントが優勢な民族でもない．しかし，グローバル資本主義を生きざるをえない以上，世俗的職業を天職として遂行する義務は，亡霊として「われわれの生活の中を徘徊している」のである[20]．

さて，われわれの問題はこうであった．おそ松は何を期待していたのあろう．それは神の呼びかけを期待していた．長男のおそ松は，単なる社会的な要請ではなく，ベルーフを，すなわち資本主義的な神からの呼び声を期待していた．言い換えると，他の人とは代わりのきかない，自分しかできない仕事を期待していたのである．われわれはどうしてもベルーフを期待せざるをえない．なぜなら，われわれがグローバル資本主義の中に生きているからである．

『おそ松さん』の結論はこうである．六つ子は，恋人も仕事もなく，それでもどこか開き直っているようでいて，それでも神からの呼びかけを期待していた．その証拠に，なんだかよくわからない「センバツ」に選ばれて，それに出場し，野球の試合をするために六つ子は仕事等をやめ結集する．それでも，やっぱり神からの呼びかけは六つ子に訪れなかった．六つ子は，決勝戦で第四銀河高校に敗北するわけである．

本章を要約しておこう．『おそ松さん』には 2 つのベクトルがあって，一方が神からの呼びかけを徹底的に期待しない在り方，もう一方が呼びかけを期待する在り方である．前者が，純粋な潜勢力に留まる在り方であり，無能に留まる在り方である．後者が潜勢力を現勢力に転化させようとする在り方である．六つ子は，純粋な潜勢力としての無能に留まる方向性を宿しながら，他方で，資本主義的な神の呼びかけに応えてしまったのである．では，前者の，純粋な潜勢力に留まる在り方はないのか．それはある．メルヴィル『バートルビー』の主題がそれである．

4. メルヴィル『バートルビー』

(1) バートルビーとは

バートルビーは，ハーマン・メルヴィルの短編，『バートルビー』の主人公である[21]．バートルビーは，法律文書の筆写係として，ウォール街の法律家に雇用される．この法律家の肩書きは衡平法裁判所主事であり，その職務は不動産譲渡証書作成，不動産権利証書の調査，その他法律文書の作成だとされる．これらの職務が増加したので，バートルビーを雇用したわけである．この法律家が『バートルビー』の語り手でもある．

はじめのうち，バートルビーは並はずれた量の筆写をこなした．しかし，彼は，3 日目に法律家が一緒にちょっとした書類を点検してほしいと言ったとき，「しないほうがいいのですが」と答える．

> ところがバートルビーは，自分の私的領域から動くこともなく，特異なまでにおとなしくも堅固な声で「しないほうがいいのですが」と答えた．そのときの私の驚き，いや狼狽を想像していただきたい[22]．

どういうわけか，幾度となく，法律家が筆写の点検を頼もうとすると，バートルビーは「しないほうがいいのですが」と応える．そのうち，バートルビーは，筆写の点検だけではなく，筆写すらしなくなるのであ

る．

バートルビーは，それまでは精力的に筆記をこなしていたのだから，筆写の能力がないというわけではない．それにしても，どうしてバートルビーは仕事をしないのか．バートルビーは筆写係として雇用されているのだから，雇用主からの命令や要求を拒否することが許されていいのか．

まず第一に，仕事とは，すでに見たように，資本主義社会においては，それが神からの呼びかけであるベルーフを意味している．したがって，それはさし当たり，神からの呼びかけを拒否することだと考えてよいだろう．しかし，それでもまだ疑問は残る．「したくありません」とか「いやです」とか，返答すればよいところを，どうしてわざわざ「しないほうがいいのですが」と応えるのだろう．法律家はバートルビーの「しないほうがいいのですが」に対して，「したくないのか」と問い詰める．それに対してバートルビーは「しないほうがいいのですが」と応える．つまり，「しないほうがいいのですが」という言説は，「したくない」という意志を表明しているものではない．筆写をすることを欲するわけでも，筆写をしないことを欲するわけでもない．あくまで，「しないほうがいいのですが」なのである．

「しないほうがいいのですが」は，英語の原文では “I would prefer not to” である．ふつう，このような使い方は，ネイティブのあいだでも，なされないようである．その証拠に，この使い方について，バートルビーの同僚ターキーは法律家に次のように述べる．「そうですね――変な言葉．私は自分ではけっして使いませんよ．[23]」しかし，かく言うターキーも，実は，前章で見た六つ子のように，現勢力への転化と潜勢力での滞留の 2 つのベクトルをもった人物として描かれている．どういうことか．ターキーは，正午を境にして有能から無能に入れ替わる人物として描かれている．ターキーは，午前中はすなわち，迅速かつ堅実で大量の仕事を有能にこなした．それとは異なり，午後は不注意になり無頓着になり無能になる．

この「しないほうがいいのですが」という奇妙な言い回しは，潜勢力が現勢力へと転化することなく，あるいはターキーのごとく現勢力から潜勢力へ変容することなく，純粋な潜勢力に留まることを表していると言える．アガンベンは，バートルビーの実験が目指すものについて次のように述べる．

> 〔バートルビーの実験が目指すのはもっぱら，〕特定の潜勢力自体が真であるかを示すことである．つまり，存在することができると同時に存在しないことができるものが真であるかを示すことである[24]．

バートルビーは筆写することができると同時に筆写しないことができる．天職概念のベルーフとの連関で言えば，神の呼びかけに対して，「しないほうがいいのですが」と応える．それは，アリストテレスが現勢力とは区別される純粋な潜勢力，ヌース（思考）の本性として見なしたものを取りだす定式なのである．

しかし，存在することできると同時に存在しないこともできたというテーゼは，哲学の伝統においては，現在の存在が必然的に存在しているという原則，過去に潜勢力が存在しなかったのも必然的であるという原則に抵触するのである．この原則の典型はライプニッツの弁神論である．純粋な潜勢力を救い出すためには，ライプニッツの弁神論にどのように対抗すればいいのだろうか．

（2）死んだ手紙

ライプニッツによれば，神は，あらゆる可能世界（存在したことはないが，存在することができた世界）のなかで，「最善なるものの選択」をしたとされる[25]．全知全能の神が悪い世界を選択するはずはないからである．しかし，ひいき目に見ても，この世界が最善のものだとは思えないのは筆者だけではないであろう．アガンベンは，このライプニッツの説を批判して，次のように述べている．すなわち，他の仕方でありえたかもしれない世界が現勢化された世界のために犠牲にされなければならなかったとすれば，犠牲にされたすべてのものの発する途切れることのない嘆きの声に対して，神は自分の耳を閉ざさねばならない，と[26]．

いずれにせよ，存在することができると同時に存在しないこともできたというテーゼを救い出そうとするならば，ライプニッツのこの議論に対して，異議申し立てをしなければならない．すなわち，この現実の世界が神の選択によって必然的に存在しているのではなく，過去に別様のしかたでも存在することができたということを示さねばならない．

ところで，アリストテレスの『形而上学』において，存在することができると同時に存在しないことができる存在は，偶然的なものと呼ばれる[27]．偶然的なものとは何か．それについては，ドゥンス・スコトゥスが明快に答えている．

> 私がここで偶然と呼んでいるものは，必然的なものでも永遠的なものでもなく，何かが起こるまさにそのときに，その反対のものが起こりえたかもしれないもののことである[28]．

偶然的なものは，存在することも存在しないことも

できたものである．そうだとすると，現勢化して存在することなく，歴史のなかに埋もれた反対のものが，現勢化されたものには，いつもすでに取り憑いている．必然には偶然が，有能には無能が，勝者には敗者が，取り憑いているということである．それを具体的に示すものが「死んだ手紙」である．

バートルビーの雇用主の法律家は，バートルビーが以前に「死んだ手紙部局」（the dead letter Office）の局員だったことを噂で知る．死んだ手紙部局とは，宛先不明等の配達不能郵便を処理する部局である．そこに届く手紙は，たとえば，以下の通りである．

> 折りたたんだ紙片から，蒼白な局員〔＝バートルビー〕が指輪を取り出すこともある――指輪をはめるはずだった当の指は墓のなかで土にかえるところかもしれない．
>
> 迅速きわまる慈善によって送られた銀行券のこともある――それによって救われるはずの当の人物は，もはや食べることも飢えることもない．
>
> 絶望のうちに死んだ人々に宛てられた許しのこともある．希望もなく死んだ人々に宛てられた良い便りのこともある．

それは，「存在しえたが実現しなかった幸福な出来事の暗号」である[29]．個人の物語であれ国家の歴史物語であれ，そこには，実現せずに埋没した出来事，それが実現していれば幸福であったかもしれない出来事が埋もれている．たまたま幸福になった個人，たまたま歴史をもつことができた民族も，それは偶然であって，不幸でもありえたし，歴史なき民でもありえた．そう考えると，誰もが「絶望のうちに死んだ」死者であり敗者でありえた．バートルビーは，この有能・無能という枠組みそのものを変える．どうやってか．勝者の歴史のなかに埋もれた敗者や死者を救うことによって，勝者の歴史が別様の在り方も可能であったことを示すことによって，ドミナントストーリに「しないほうがいいのですが」と水を差し，オルタナティブストーリが可能であったことを示すことによってである．しかし，このことにどれほどの意味があるのだろうか．

たとえば，AI に勝つためには，読解力を伸ばさなければならないという本がベストセラーになった．読解力を伸ばせば，ＡＩに仕事が奪われない，ということである．それはそれでけっこうなことだが，そもそも読解力を伸ばせない階層がいる．苅谷によれば，基本的生活習慣ができていない子どもは，できている子どもに比べて，勉強時間ゼロおよび読書時間ゼロの割合が高い．その格差は 1989 年から 2001 年の間で拡大している[30]．読解力を伸ばせるのは，家庭環境に恵まれて読書をしている子どもが有利だということだ．しかも，読解力を伸ばせばＡＩに仕事が奪われないというのは，読解力を伸ばさないならば，人々は仕事が奪われてしまうというような悲惨な社会が前提となっている．つまり，われわれの社会には，たまたま家庭環境に恵まれ，運良く読解力を伸ばし，仕事にありつけた人々と，運悪く家庭環境に恵まれずに，読解力を伸ばせずに，仕事にありつけなかった人々がいるということである．その社会には勝者がいて敗者がいる．競争から降りることはグローバル資本主義においては難しい．では，どうすればいいのか．有能であることに与するエピステーメから，どうすればわれわれは脱することができるのだろうか．読解力を伸ばしなさいという呼びかけに，「しないほうがいいのですが」と応じる．そういう仕方で，ドミナントストーリであるグローバル資本主義の枠外に出るのである．

最後にもうひとつ，事例をあげよう．筆者が参観した特別支援学校の教室には，知的に重度の障がいを有する緘黙の子ども達がいる．その特別支援学校では，緘黙の子どもたちをどう評価するのか，という課題がある．緘黙の子どもたちは自分を表現することがきわめて困難だからである．これからの子どもたちに求められる「確かな学力」が，知識・技能の習得のみならず，思考力・判断力・表現力を含み，学ぶ意欲を重視するものだとして，緘黙のほとんど表現しないような子どもたちをどう評価するのであろう．その緘黙の子どもの潜勢力はいったいどういったものであろう．

その緘黙の生徒の担当教諭が，その生徒にこう言われた．「君はこれまではみんなから距離を取っていたけれど，今はどうかな？」それで，その教諭は，生徒全員の写真つきの名簿を急いで持ってこられた．どうされるのかなと見ていると，教諭は，その生徒に，友だちの名前と顔を一つ一つ確認させながら，次のようにその生徒に言われた．「ほら，友だちがいっぱいできたね．たくさんの友だちと関われるようになって，以前と比べて君はとっても穏やかになったんです．」このようにして，教諭は，緘黙の子どもの，声にならない声，存在しえたかもしれないが存在しかなった声を救い出そうとするのである．

おわりに

現代の日本社会において求められている学力は，広義では，自ら課題を発見して，自ら考え，自ら課題を解決する「生きる力」であり，狭義においては，学ぶ

意欲をもち，習得した知識や技能をもとに思考し判断し表現する能力である「確かな学力」であることを第1章では確認した．しかし，こうした学力が子どもたちを幸福にし，よりよい社会を可能にするかというと，それほど問題は単純でない．「生きる力」や「確かな学力」を育めるのは，家庭環境に恵まれた子どもであるというエビデンスがあるのである．

第2章では，メリトクラシーを相対化し，既存の学力概念を再構築しなければならないとする小玉の議論を検討した．第3章および第4章では，『おそ松さん』や『バートルビー』を手がかりにしながら，有能・無能についての再検討を試みた．

『おそ松さん』には2つのベクトルがあって，一方で，純粋な潜勢力，無能に留まる在り方がありつつ，他方で，それでも有能になって世界に必要とされたいという願望がある．どうして六つ子は潜勢力に留まれず，現勢力への転化を期待するのか．そこに，われわれを支配する資本主義的な原理が駆動しているからである．すなわち，世俗的職業を神の呼びかけだと見なす天職倫理が，である．

それに対して，『バートルビー』は徹底的に純粋な潜勢力に留まる在り方を示唆している．バートルビーは，「しないほうがいいのですが」とだけ言う．「しないほうがいいのですが」という奇妙な言い回しは，現勢力への転化をくい止め潜勢力に留まる定式，支配的な物語にもう一つの物語も可能であったと示す定式なのである．

現代の資本主義社会は，貧困の問題，飢餓の問題，地球温暖化の問題等，解決できない問題を抱えている．その問題を資本主義の枠内で解決しようとしても難しい．それもそのはず，資本主義そのものが貧困や格差を生み出し，地球温暖化をもたらしているからである．要するに，資本主義それ自体が問題なのである．学力の問題も同様に，どうしても学力について資本主義的な発想から考えざるをえない．われわれは，その支配的な物語をいったん判断中止して，それとは違うエピステーメから学力について考えることも可能であったと示さねばならないのではないか．

とはいっても，資本主義の枠外の学力が具体的にどのようなものとなるのかをわれわれは示すことができないでいる．それは今後の課題である．

註

[1] 『マルクス＝エンゲルス全集第6巻』，大月書店，1961年，271頁．

[2] 2016年の中教審答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」においては，2030年の社会を見据えて，子どもたちに育成させたいものが「生きる力」とされている．

[3] 苅谷剛彦『学力と階層――教育の綻びをどう修正するか』，朝日新聞出版，2008年，28頁．

[4] 同書，29頁および31頁参照．

[5] 同書，33-34頁．

[6] 同書，31頁参照．

[7] 小玉重夫「学力――有能であることと無能であること」，田中智志・今井康雄（編）『キーワード　現代の教育学』，東京大学出版，2009年，所収，241頁．

[8] 同書，244頁．

[9] 同書，同頁．

[10] 田崎英明『無能な者たちの共同体』，未來社，2007年，178頁．小玉，前掲書，246-247頁参照．

[11] 小玉，前掲書，245頁．

[12] ジョルジョ・アガンベン『バートルビー――偶然性について［附］ハーマン・メルヴィル「バートルビー」』，月曜社，2005年，14-15頁．

[13] アリストテレス『形而上学（下）』，岩波文庫，1961年，24頁参照．

[14] 同書，26頁．

[15] 同書，161-162ページ参照．

[16] アリストテレス「魂について」，『アリストテレス全集第7巻』，岩波書店，2014年，所収，146頁参照．

[17] 厚生労働省政策統括官付政策評価官室「平成22年社会保障を支える世代に関する意識等調査報告書」，2010年．

[18] 大澤真幸『サブカルの想像力は資本主義を超えるか』，角川書店，2018年，180頁．なお，『おそ松さん』の考察については本書を参考にした．

[19] マックス・ヴェーバ『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』，大塚久雄訳，岩波文庫，1989年，95頁．なお，亀甲括弧による補足は翻訳者の大塚によるものである．

[20] 同書，365頁参照．

[21] ハーマン・メルヴィル「バートルビー」，アガンベン，前掲書，所収．

[22] 同書，107頁．

[23] 同書，130頁．

[24] 同書，73頁．なお，亀甲括弧による補足は，引用者による．

[25] ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ『ライプニッツ著作集第6巻』，工作舎，1990年，308頁および329頁．

[26] アガンベン，前掲書，72頁参照．

[27] アリストテレス『形而上学（上）』，岩波文庫，1959，218頁参照．

[28] Duns Scotus, *Ordinatio* I, d. 2, p.1. q. 2, n. 86.

[29] アガンベン，前掲書，80頁．

[30] 苅谷，前掲書，37-41頁．